

花まつりのてんぐ

愛知県の昔話と伝説

日本児童文学者協会／編



338 日本児童文学者協会

花まつりのてんぐ

偕成社 ふるさとの民話 1

219p. 22cm 1978



(ふるさとの民話 1)

花まつりのてんぐ

一九七八年七月 初版第一刷発行

編者 日本児童文学者協会

発行者 今村廣

発行所 株式会社 偕成社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町三一五

電話／〇三(二六〇)三二二一

振替／東京五一三三二

印刷 新興印刷製本株式会社

製本 文勇堂製本工業株式会社

乱丁本・落丁本はおとりかえいたしません。

ふるさとの民話1 愛知県

花まつりのてんぐ

日本児童文学者協会編

偕成社

●刊行のことば

いつの時代にも子どもたちは民話が大好きです。本ざらいな子も、民話の本ならば喜んで読むという話も聞きます。考えてみれば、それも当然のことかもしれません。

民話には、長い時間にみがきぬかれた簡潔平明な語りのおもしろさと、ふるさとの風と光、遠い祖先の知恵、夢と希望、喜びと悲しみ、笑いと涙が、さまざまにこめられているはずですから。それを読むものが、どんなに幼くても、同じ風土にそだったのならば、おのずからなる親しみをそこに見いだすでしょう。

わたしたち児童文学にたずさわるものは、日本の子どもたちに、この祖先の貴重な遺産を正しい形でつたえることを、なによりもたいせつなことだと考え、ここに日本児童文学者協会創立30周年記念出版として、県別『ふるさとの民話』（全47巻）を発行することにいたしました。

各県の代表的な民話のほか、これまで紹介されなかった民話、活字化されなかった民話ができるかぎりほりおこし、さらに明治以降の新しい民話もくわえて、従来にない、地方色豊かな民話シリーズをつくるべく努力したのです。

むろん、このような大事業は、わずかな人数だけでできるものではありません。地方在住の会員の協力と、各地の民話研究家、民俗学者の一方ならぬご援助をあおぎました。心よりお礼もうしあげます。

日本児童文学者協会

『ふるさとの民話』編集委員会



「ヤマトタケルとミヤズ姫」より (本文39ページ)

此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

はじめに

しかた しん

愛知県は、むかし尾張の国、三河の国といわれた、ふたつの国でできています。この尾張と三河のさかいめは、どうじに東日本と西日本とのさかいめでもありました。それで、この地方はむかしから、日本の東と西をむすぶへわたりろうかゝのような役わりをはたしてきたのです。

へわたりろうかゝをいきかう旅人たちは、東の国や西の国の、さまざまの話をたえていきました。そして、それらが地元の伝説や世間話とまざりあつて、ゆたかにふくらんだ愛知の民話をつくりあげています。

しかし、おなじ愛知県とはいっても、平野部、山国、海ぞいの地方と、それぞれ人びとのくらしがちがうように、民話のもつふんいきも、すこしずつちがつています。そこでこの本では、旅人のものがたり、名古屋城の話、山、海、川、村や町につたわる話というふうに、地域の特徴をかんがえてまとめてみました。

どうか、たのしくあじわってよんでください。

花まつりのてんぐ——もくじ

旅人^{たびびと}のものがたり

じようるり姫 ^{ひめ}	12
初連ギツネ ^{しよれん}	17
ばかされたタヌキ	21
まぼろしの金魚 ^{きんぎよ} 花火 ^{はなび}	26
せとものまつりの雨 ^{あめ}	32
ヤマトタケルとミヤズ姫 ^{ひめ}	39



金のシャチの

お城の話

とぼけ村 48

のろりのろりの小田井人足 55

毛かえ地蔵 60

うめく金シャチ 65

山につたわる話

花まつりのてんぐ 70

水こい鳥 79

犬千代さ 85

おうむ石 90

鳳来寺の三びきのおに 96

海につたわる話

かしき長者 107

竜神の燈 113

川^{かわ}につたわる話^{はなし}

村^{むら}や町^{まち}につたわる話^{はなし}

犬^{いぬ}をかわない島^{しま}

120

へこきのへえ七^{しち}

124

やろか水^{みず}

129

では陸^{りく}をまいろう

134

かつばのやけどみまい

138

水ぬすびと^{みず}

143

子^こだが橋^{はし}

148

つと穂^ほでみのれ

155

やつとべえとてんぐ

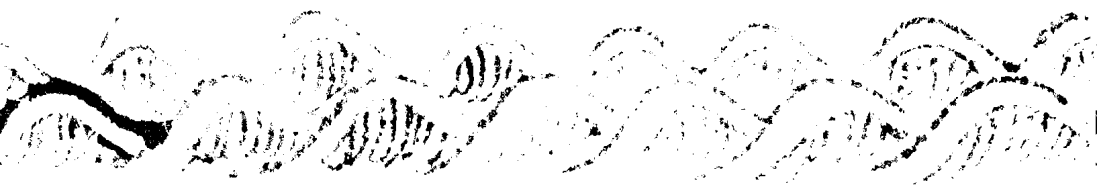
163

まるかの人星^{ひとほし}

169

酒^{さけ}のみタヌキのたぼうず

177



コレラと巡査 じゅんさ 182

ここをぬけたすつばさがほしや 188

伊勢湾台風とくつ塚 つづか 159

《解説1》 いまも生きてゐる民話 みんわ 「ふるさとの民話」編集委員会 200

《資料》 愛知県の民話地図 あいちけん みんわちず 204

《解説2》 愛知県の民話について あいちけん みんわ しかた しん 206



●編集委員

岩崎	京子	大石	真
久保	喬	木暮	正夫
柴野	民三	渋谷	清視
竹崎	有斐	鳥越	信
西本	鶏介	浜野	卓也
前川	康男	松谷	みよ子

しかたしん(現地責任者)



■装丁	———	司修
■さし絵	———	斎藤博之
■絵地図	———	坂川知秋

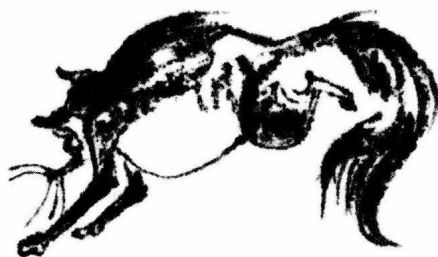
愛知県の昔話と伝説

花まつりのてんぐ

日本児童文学者協会編



たび びと
旅人のものがたり



じょうり姫^{ひめ}

〈伝説・岡崎市〉
でんせつ おかざきし

いまからおよそ八百年ぐらいまえ、さむらいや
とうぞくたちが、力があれば、いくさをしかけて
よその国をとろうとうかがっていた、ぶっそうな
ころの話^{はなし}。

でも、みやこからおくはなれた矢作^{やぎ}の村では、
まだまだ、おだやかなくらしが、まい日つづい
とった。

春^{はる}になれば、街道^{かいどう}のサクラが、いつせいにさく。
その道^{みち}すじに、たいそうりっぱなかまえのやし
きがあった。それは兼高^{かねたか}長者^{ちやうじや}のやしきで、三だん

五だんとくみあわせた石がきの上には、白い倉が、いくつもならび、やねのいらかは、一里（四キロメートル）もさきから、きらきらかがやいて見えたそうな。

その長者やしきには、じょうるりという名まえの、うつくしいむすめがおった。

なんでも長者が、鳳来寺の薬師如来におまいりしてさずかったということで、そのかわいがりようときたら、そりゃあ、かくべつなもんじやった。あけてもくれても、

「じょうるり……じょうるり……」

と、よんで、そばからはなそうとせん。

こうして、なにひとつ不自由なく、そだてられたじょうるりは、年ごろになるにつれて、かがやくばかりにうつくしいむすめになった。村人からも、花のようにきれいなかたじやと、うわさされ、「姫さま、じょうるり姫さま。」とよばれとった。

そんなある日、若いつばな武士とけらいの一行が、矢作の村にやってきた。

その若い武士は、源九郎義経で、平家にはろぼされた源氏の家をおこすために、鞍馬山の寺からでてきて、ひそかに奥州（いまの東北地方）にくだる旅のとちゅうじやった。

人目につかぬように、山のぬけ道をとったり、ときには野宿というような旅が十日、二十日とつづいたので、さすがの義経も、身も心も、すっかりつかれきっておった。

そこで、おともの金売り吉次は、こののどかな村につくと、さつそく兼高長者のやしきへ行って、一行をやすまでもらえまいかとたのんだ。すると長者は、

「このようなひなびたところで、なんのおもてなしもできませぬが、なん日でも、おとまりくだされ。」と、こころよく、ひきうけてくれた。

義経たちは、長者のことばにあまえて、しばらく、ここですごすことになった。

長者やしきは、いっぺんに、にぎやかになった。これまで、やしきのなかでだいじにそだてられ、だれとも話をしたこともなかったじょうりだったが、このめずらしい客をむかえてからは、ときどき小鳥のような、はれやかなわらい声をたてるようになった。

義経も、そのじょうりのやさしさに、ひかれないはずはなかった。そうして、たのしいまい日をすごした。

でも、そういうおだやかな日びは、いつまでもはつづかなんだ。

義経のゆくてには、ほろびた源氏をふたたびおこすという、大きなやくめがあったからじゃ。

そこで、いよいよ旅だつ日、義経は、じょうりにむかつて、

「わたしは、これから奥州へいかねばならん。これは、母のかたみの、うすずみという名の笛じゃ。この笛を、そなたにあずけておこう。いずれまたあうときがくるまでな。」



と、一本の笛をさしだした。じょうるりは、なにもいえずに、笛を両手でうけとると、いつまでも、むねにだきしめておった。

それから、じょうるりにとって、かなしい日がつづいた。

「奥州は、地のはてのとおい空の下じゃ。」

と、長者はいつて、じょうるりの思いをあきらめさせようとした。だが、じょうるりの心は、ますます、とおい奥州にむかっていく。

ある秋の夜のこと。じょうるりは、うすずみの笛をだいて、ひとりで、やしきをぬけだした。

「奥州、奥州へ……。」

と、つぶやきながら、足は、おのずと北のほうへむかっていく。

月のあかるい夜じやったが、じょうるりにとつ